

## エッセイ特集1 病気・医療・看護とヴィクトリア朝文化

### Victorian Nursing Discourse の系譜 ——ジェンダーと物語展開

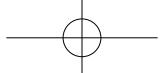
西垣 佐理

#### はじめに

近年、文学・文化研究において、医療・公衆衛生・看護の言説が隆盛の兆しを見せ始めてきている。とりわけ、ヴィクトリア朝文学と病・医療・看護の場面についての研究が以前よりも注目されるようになってきたが、それには、19世紀イギリスで科学や医療・公衆衛生分野が大きく進展したこと、およびフローレンス・ナイティングール（1820–1910）のクリミア戦争での活躍などで、文学作品中に病や医療・看護の場面が数多く描かれたことなどが理由としてあげられるだろう。だが、これまでこうしたテーマがヴィクトリア朝文学・文化研究の課題として意外にも見過ごされてきたのは、物語における登場人物の病や死というものが、人生にとってあまりにも当然の事象であったがためなのかもしれない。

なかでも、ヴィクトリア朝イギリス文学における「女性と職業」というテーマで考える際に取り上げられてきたのは、圧倒的に家庭教師（ガヴァネス）か作家であって、看護師について語られることはほぼなかった。その一因として、当時の文学作品の主要読者層は中流階級の女性たちであって、彼女たちがリスペクタビリティを保持しつつ、ある程度経済的に自立できる職業がその二つしかなかったからである。それに対して看護師は、ナイティングールが1860年にロンドンのセント・トマス病院に看護学校を設立して以降、中流階級の女性たちが就くことのできる新しい職業として認知されるに至った。しかし、それまでの間、看護師は患者の身体に触れるという職業上の性質から、リスペクタビリティとは程遠く、ともすれば

『ヴィクトリア朝文化研究』第16号（2018年）



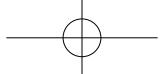
売春婦ともみなされかねない、あるいはアルコール依存症に陥った元産婆上がりの女性たちによってなされる卑しい職業だと考えられていたのだ。そうした旧来の職業看護師の事例は、チャールズ・ディケンズ（1812-70）の『マーティン・チャズルウィット』（1843-44、以下『マーティン』）に登場するギャンプ夫人によって見事に体現されており、この作品がナイティンガール登場に先立って看護師改革の必要性を訴えていたことは有名な話である。

ところが、この作品において注目すべきなのはそれだけではない。『マーティン』には、一般的の男性登場人物による看護場面が用意されているのである。男性による看護行為は、女性の専門職としての看護師の劣悪な状況を伝えるのみならず、そうした状況に対する一種のアンチテーゼとして機能している。換言すれば、ヴィクトリア朝時代のイギリス文学における看護行為が、必ずしも女性だけのものではなかったという事実をディケンズが示していた、ということでもあるのだ。看護の仕事は女性が担うという言説は、あくまでもナイティンガールがクリミア戦争の時にスクタリの病院に女性従軍看護師を連れて行って以降のものであり、それまでは普通に男性が看護人として戦場で患者の兵士たちを見ていたのである。その意味で、イギリスにおける近代看護の言説は、ナイティンガールとディケンズから始まった、と言えるかもしれない。

こうした観点から、本エッセイでは、ヴィクトリア朝文学における看護の言説を、その枠組みから文学作品における実践例まで、特にディケンズの作品を中心にまとめ直すことを主眼とし、その上で、今後のヴィクトリア朝文学・文化研究において医療・看護・病のテーマを考察する一助となればと考えている。

### 1. ヴィクトリア朝イギリスにおける病・公衆衛生・看護

19世紀イギリスにおいて、病と公衆衛生に関する進歩が目覚しかったのは周知の事実だが、その発展に伴い、公衆衛生と看護にも密接な関係が生じた。エド温・チャドウィック（1800-90）が執筆した『大英帝国における労働者の衛生状態に関する報告書』（1842）および1848年の公衆衛生



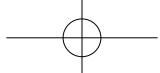
法の制定などが、英国民に病と衛生状態が密接に関連していることを喚起し、それが看護の質の改善にも大いに役立ったのである。実際、ナイティンゲールはクリミア戦争時にスクタリの病院を清潔にし、看護師たちに制服を着せ、風通りをよくして菌の繁殖を防ぐなどして病室の環境改善に努めた。また、彼女の著書『看護覚え書——看護であること看護でないこと』(1860)でも、当時の公衆衛生では最新とされた手洗いや病室の換気を勧行しているのである。

そして文学作品においても、例えばディケンズの『荒涼館』(1852-53)で、ヒロインのエスター・サマソンが病室の換気に注意を払っている場面が登場するなど、早速当時の公衆衛生に関する考え方方が実践的に取り入れられていたことがうかがえる。特にディケンズは、自ら文学作品を通じて社会改革を促したいと考えていた作家でもあったことから、当時の社会問題を作品内に取り入れることはよくあった。その意味で、社会と文学の関係は現在ほど乖離しておらず、文学作品における看護の言説が実際の社会でも行われていた事例とほぼ変わらないとも言える。

さらに、医師および看護師の数がヴィクトリア朝期を通じて増大していくことは、文学における医療専門職に携わる人物が登場する場面が増えていったこととも比例している。かつてと比べて、もはや病が死すべきものではなくなり、看病次第で回復することもあり得るようになったことから、病室の場面や、登場人物たちの看護行為そのものが物語上の重要な転換点の一つになっていったとも考えられるのである。

## 2. 看護の主体と客体、物語上における女性の看護

さて、ヴィクトリア朝文学作品における看護の事例を考えていく際、看護する主体——すなわち専門職の看護師あるいは家族などのアマチュアの看護人——と、看護される客体である患者それぞれの性別によって、いくつかの型が存在する。中でも、当時の文学作品内で最も多くみられたのが、アマチュアの女性が男性患者を見るというパターンである。というのも、特にヴィクトリア朝時代の中流階級に所属する女性たちは、コヴェントリー・パトモア(1823-96)が称揚したいわゆる「家庭の天使」としての義

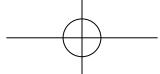


務を遂行することが求められており、看護はその理想像を体現するのに効果的な行為の一つだと考えられていたからである。当時は、家庭に病人や怪我人が出た際も、病院に入院して治療するということではなく、もっぱら在宅で医師の往診を受けるのが基本であり、在宅看護が当たり前の時代であった。そのため、一家の主婦たる女性が看護の主体となるのが自然であった。それゆえ、ヴィクトリア朝文学作品においても女性が看護の主体を担うのがさも当たり前であるかのように描かれている。

ただ、その際に留意すべきなのは、看護人（大抵はヒロイン）が家族や恋人の男性を看病することで、物語内で看護人と患者の関係が大きく変化する契機となっている場合がある、ということなのである。そして、リスクペクタビリティを体現する「義務」の一環で看病する女性たちは、看護を通じてそれまでの従属的な立場から逆転し、さらには男性に対して優位に立つことで物語の主役となる。

キャサリン・ジャッドは、ヴィクトリア朝文学における看護の言説を早いうちから論じていたが、彼女の著書『病床での誘惑——看護とヴィクトリア朝的想像力、1830-80』（1998）において、こうした女性たちによる看護を、「女性の英雄的行為の現れ」（99）だと見なしている。文学作品においては、例えばシャーロット・ブロンテ（1816-55）の『ジェイン・エア』（1847）で、ヒロインのジェインが火事で失明の危機に陥ったロチェスター氏を看病し、その後結婚に至るという結末を迎えていた。また、ディケンズの『骨董屋』（1840-41）の「侯爵夫人」や、『リトル・ドリット』（1855-57）のヒロイン、エイミーの例でも、それぞれディック・スウェーラーやアーサー・クレナムといった男性主人公たちから最初庇護の対象として見られていたが、その後彼らが病に倒れた際、男女の力関係が病室内で逆転し、ヒロインたちが彼らを看病して回復に導き、結果として彼らの良き伴侶として最終的には結婚するという結末を迎える。物語における女性の看護には、男女の力関係の逆転という、当時のジェンダー規範の転覆を促す側面と、患者である恋人の身体に堂々と触れることができ、最終的に思い人と結ばれたいという密やかな欲望を満たす手段でもあったのだ。

また、看護は感染の危険性もある行為であることから、ヒロインの自己犠牲を描くためにも用いられている。例えば、先述した『荒涼館』のエス



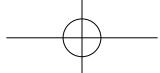
ターは、伝染病にかかった少年ジョーを看護してその後感染したメイドのチャーリーを看病するのだが、それによって自らも感染し、一命は取り止めるものの、生来の美貌を失ってしまう。しかし、エスターがその後も自らの義務に忠実に、リスペクタビリティを保持し続けるよう努力を続けた結果、愛する男性アラン・ウッドコート医師と結ばれ、最終的には彼女の美德が報われる結末となる。

他にも、ディケンズと同時代の女性作家エリザベス・ギャスケル(1810-65)の『ルース』(1853)においては、ヒロインのルースは「墮ちた女」として、不義の子を育てながらプロの看護師となり、伝染病が蔓延する村で献身的に患者を見ることで汚名を返上した。だが、その後同じ伝染病にかかっていた昔の恋人ベリンガムをルースは看病し、その甲斐あって彼は一命を取り留めるものの、看護した彼女自身が病に感染し、回復することなく亡くなってしまうのだ。こうした物語において、ナイティンゲール登場以前のヴィクトリア朝文学における看護とは、多少の犠牲を伴いつつも、女性の美德を体现し、たとえ「墮ちた女」であったとしても救済の道が得られる行為として考えられていたということができるであろう。

次に多いのが女性看護人と女性患者の事例で、『荒涼館』におけるエスターとチャーリーの関係や、ギャスケルの中編小説「一時代前の物語」(1855)などで見られ、看護人・患者双方の人生が大きく変化したり、女性同士の絆が生まれたりする契機となっている。このように、ヴィクトリア朝文学に女性の看護行為がヒロインの人物造型と密接に関わっており、看護人としての資質が、時代の理想的女性像を作り上げる一つの重要な要素として考えられるようになったのではないかと考えられる。そして、ナイティンゲール登場以降、看護の質は変容し、単純に時代が要請した理想的な女性の義務や美德を表すものだけではなく、中流階級女性の経済的自立を促すリスペクタブルな専門職の一つとしてみなされるようになっていくのである。

### 3. 男性による看護とその意義

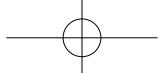
だが、そうした風潮の中でも、ディケンズがいくつかの作品で男性によ



る看護の場面を描いていることは興味深い。先にも挙げた『マーティン』では、主人公マーティンが経済的自立を目指してアメリカに渡るも夢破れ、その結果体調を崩してしまった際、従僕のマーク・タブリーから献身的な看護を受ける。マーティンが無事病から回復した後、今度はマークが倒れてしまうが、その時はマーティンが代わりにマークを看護することになる。こうした場面は、身近にヒロインが不在であるためにやむを得ないのだという理屈も通るであろうが、この場合男性が看護することによって、男性同士の階級を超えた友情が成立するという意味合いの方が大きい。つまり、「家庭の天使」としての義務で女性が看護する場合とは、看護のもたらす意味合いが大きく異なるのである。

特にディケンズが描く男性の看護は、男性同士のホモソーシャルな関係を強化するのに使われることがあるという点は注意を払う必要がある。他にも、後期小説『大いなる遺産』(1860-61)では、すべてを失い熱病にかかったピップを献身的に看護するのは、義兄で友人でもある鍛冶屋のジョー・ガージヤリーであり、彼の看病によってピップはそれまでの利己的な自分を変えることに成功する。また、看護の場面を通じてピップとジョーの友情も強化される。ジョーは基本的に「穏やかで、お人好しで、優しい気立ての、のんきで愚かだが愛すべき男——ヘラクレスのような強さと、弱さも合わせ持っていた」(40)と描かれ、元々屈強な男性でありながらも心根は看護人としての素質を持っていた人物として描かれており、その意味でも、女性だけが立派な看護人というわけではないことが示されている。

ただし、男性による看護がホモソーシャルな縊の強化につながり、物語展開においても重要な転換点となりうるのは、彼らの患者があくまでも男性の場合に限られていることには注意すべきである。というのも、男性が女性を看護する場合、そこに恋愛、あるいは夫婦関係か介在することによって、ある種の利害関係が生じており、女性が行う看護ほど美徳が報われるといった形になっていないからなのだ。例えば、『ハード・タイムズ』(1854)で、工場労働者であるスティーブン・ブラックプールは、酒好きで精神疾患の妻の看護を行っているが、その実同僚のレイチエルとの結婚をひそかに願っており、完全に無私の状態で看護を行っているわけではない。また、『マーティン』や『大いなる遺産』における男性同士の看護例とは異なり、

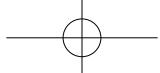


レイチェルがステイーブンを手伝うために、看護人としての役割を果たしているので、その意味で、真に男性登場人物のみが看護人としての役割を果たしているのではない。しかも、ステイーブンの看護は最終的に報われず、当然レイチェルとも結ばれることもなく、ステイーブンは労働争議の犠牲者として亡くなってしまうのである。

このような男性による看護行為は、ディケンズ作品では顕著であるものの、それ以降の例としては、エミリー・ブロンテ(1818-48)の『嵐が丘』(1847)でエドガーが妻のキャサリンを看病する場面や、南アフリカの女性作家、オリーブ・シュライナー(1855-1920)の『アフリカ農場物語』(1883)で死の床にあるヒロインのリンダルを、かつての婚約者グレゴリー・ローズが女装をして看護を行う例があげられるものの、それ以外はあまり見られない。ただ、両作品とも、男性による看護は専門職の女性看護師たちのそれと遜色ないと語られているのである。ちなみに、『アフリカ農場物語』でグレゴリーが女装した理由として、作品が書かれた頃には、看護、特に専門職の看護師は女性が担うものという認識が既に出来上がっており、男性のままで女性を看護することは、夫や兄弟など、よほどの理由がない限り難しい状況になっていた、という時代の変化も挙げられよう。

だが、それだけではなく、グレゴリーの場合、本人が男性らしさとは何かというところに疑問を抱いている。だから、彼がリンダルを看護する前に女装をしてその姿を鏡で見た際、自らの中に新たな自己が存在することを認識するようになった、という点は看過できない。しかし、いくら献身的な看護を行っても、患者であるリンダルにとっては、プロの女性看護師に見てもらったという認識しかなく、グレゴリーが看護しているのだと気づくことはない。そしてリンダルはグレゴリーの看病の甲斐なく亡くなってしまうので、結局彼の自己満足に終わってしまっているのだ。

ここでヴィクトリア朝文学作品に見られる男性の看護を改めてまとめみると、患者の性別によって、看護の持つ意味が大きく異なることがわかる。男性同士の場合、友情という名の下に強固なホモソーシャルの関係が築き上げられる。だが、男性が女性を看病する場合、主に看護する男性側に様々な思惑があり、それ故に女性のように美德や義務を表す行為とは見なされにくい。しかも、たとえ男性看護人たちがいかに献身的に看病した



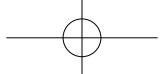
としても、患者たる女性側に様々な問題点があつて彼らの看護行為が報われることがないのは、ヴィクトリア朝後期に登場した、いわゆる「新しい女」と対応する「新しい男」がまだ登場していなかつからだろう。「新しい女」は、当時の強力な性的役割分業を根底から覆す可能性を秘めた存在であり、それに呼応する「新しい男」が新たに登場し、看護行為を通じて当時のイデオロギーを転覆するわけにはいかなかつた。まさに、そこが社会と密接につながつていたヴィクトリア朝文学作品の限界であったとも言えるのである。

#### 4. Victorian Nursing Discourse と現代日本

これまで、ヴィクトリア朝文学、特にディケンズ、ギャスケル、シュライナーなどの作品に見られる看護行為の事例について見てきた。男性の看護については若干の目新しさが残るかもしれないが、女性による看護場面は、その後文学作品の一種の典型例となつていったために少々使い古された感がある。ただ、ヴィクトリア朝的な近代看護の言説そのものは、むしろ21世紀の日本でこそ必要なものとなりつつあるのではないだろうか。

現代の日本では、高齢化社会に伴う医療費抑制のために長期入院は許されず、19世紀イギリスのように在宅看護・介護の必要性がむしろ高まつてきている。また、かつては一家の「嫁」の仕事だとされた看護が、今や共働き世帯の増加により、実子である男性が年老いた親の介護の中心的担い手となる事例が増えてきているのだ。さらに、専門職である看護師や介護職員の数は、その待遇がなかなか改善されないせいもあって大幅には増えず、慢性的に人手不足である。つまり、アマチュアである家族が看護・介護の中心とならざるを得ない事態が出現しているのだ。

また、日本の看護や医療はナイティングールに大いに依拠しているところがある。女性たちが看護師という医師に従属的な立場にいることが多いのは、看護師を中流階級の女性たちにとってリスペクタブルな専門職にしたいナイティングールが、看護師の女性が男性医師に従属的であることを良しとし、世間に受け入れられやすいように仕向けたものだったからである。そして、ナイティングールは男性医師と同等の立場になりうる女性医



師の養成については批判的であった、とも言われている。たしかに、それは当時の性的役割分業という考え方には合致するものだったからということもある。だがそれが皮肉にも、医療の世界で活躍する後世の女性たちにとってある種の枷となってしまった。そして、最近巷で話題となっている、女性医師が日本でなかなか増えない遠因の一つになっているのかもしれない。さらに、日本では男性看護師の数も以前よりは多くなってきたとはいえ、女性に比べるとまだまだ増えない現状があるが、これもまたナイティンガールが野戦病院に女性看護師を持ち込んだことによって、看護は女性のものだという認識を世間に知らしめたからだと考えるのは、あながち間違いであるとは言い切れないだろう。

いずれにせよ、ヴィクトリア朝時代のイギリスに生まれた近代看護の言説は、現代日本から完全に消えてはおらず、むしろ残ったままなのだと再認識した上で作品研究を行っていくことこそが、今後のヴィクトリア朝文学・文化研究にとって必要なではないだろうか。

#### Works Cited

- Dickens, Charles. *Great Expectations*. Edited by Angus Calder, Penguin, 1985.  
Judd, Catherine. *Bedside Seductions: Nursing, and the Victorian Imagination, 1830–1880*. Macmillan, 1998.

——近畿大学准教授

